滞在記

ヒマラヤ，なつかしの地と人

名古屋大学環境学研究科　上田　豊

はじめに

2004年秋，28年ぶりにネパールのクンブ地方を再訪した．初めてのヒマラヤ登山からちょうど40年が，本格的な氷河調査をクンブで始めてからなら30年が過ぎていた．わたしをご存じの方には，ヒマラヤには何度も行っていながら，標題に「なつかしの・・」と付くのは，おかしいと思われるかもしれない．だが同じ場所には一時期くり返して行くことはあっても，何十年も行き続けるわけではない．

今回のクンブ再訪は，定年が近いわたしにとって最後のフィールド調査になるだろうと思うと，これまでのなつかしい思い出が浮かぶ．近年，若手が海外のフィールドを経験する機会は急増し，本誌の「滞在記」を彩っている．学会誌にわたし個人の感傷的な話を連ねるのはどうかと思うが，長年フィールドに思い入れがあればこんな感慨も生まれるということを，かなり前にも書いた2題とともに紹介する．

そのⅠ．17年ぶりのショロン（1996年）

1978年のモンスーン期に5カ月，翌年の3・4月と9月にも，わたしは東ネパールのショロン地方にあるAX010氷河に滞在し，夏の雪で涵養される氷河の特性を調べるため，質量収支などを観測した（渡辺・上田，2001）．その間ずっと，近くの村ジュンベシに住む農業と茶店が本業のシェルパ，アン・リンジが助けてくれた．当時32才だったかれの少年期には，まだネパールに学校が普及していなかった．そして20代には，チベットでの牧畜とブータンでの地酒商に，その大半を送った．きびしい異郷で生活する間に，かれがどのような経験をし，何を学んだのか，わたしは知らない．が，かれの持つすばらしい知恵とやさしい誠意に，わたしは何度も感服した．

リンジは，なぜわたしたちが雪に背丈より深い穴を掘り，また硬い氷をボーリングしようとするのか理解し難かったろう．だが，進んでこんな力仕事にあたり，だれよりも上手に，根気よくやってくれた．かれは，頼まれた事のみではなく，それ以上のことを常に自分で真心をこめて考えた．かれと仕事をするとき，多言は無用だった．

ジュンベシの富農アン・ドルジ氏は，わたしがやとったシェルパ頭，J.P.ラマの父親である．かれはシェルパ族ではめずらしく，この息子をカトマンズの大学にやっている．そして4人の娘を地元の学校へかよわせ，さらに身寄りのない2人の子供をひきとっている．調査のたびにわたしはかれの家に泊まり，ベース・キャンプへ登る態勢を整えるため，ポーターや物資の手配をしてもらった．かれの家で熱をだし，2日間寝こんだことがある．そのときのかれの気づかいは，まさに肉親のようであった．

すべての調査を終え，ドルジ家を去るとき，かれはわたしの手を握り，真剣な顔でたずねた．「調査は成功したか？」「はい，おかげで成功しました」．そしてわたしは，この日まであたためていた言葉を，おもいきって言った．「あなたのことを，わたしのおやじみたいに思っています」．気はずかしさと，長かった調査への感慨が重なりあって，かれの顔を正視しては言えなかった．

それから20年近くを経た1996年，ひさびさにAX010氷河を訪れる機会がきた．トレッキング会社を営むようになったJ.P.ラマのカトマンズ宅に招かれたとき，父親のドルジ氏に再会した．ガンを患っていると聞いていたが，ソファーに座り，静かにわたしたちの歓談を見つめていた．病状にも波があって，その日は調子がよい方だと息子か

ら聞いた．別室では，ドルジ夫人が17年まえと同じように，ベッドの上に仏像のごとく座っていた．

ジュンベシでは，リンジのロッジに泊まった．向かいの校庭で，偶然ドルジ氏の三番目の娘さんに合った．かつてのかわいい少女は美しく成長し，アメリカから友達をつれてきて案内しているところだった．村を見下ろす高台にあるドルジ家をたずねた．昔のままのたたずまいだった．庭にはいると，番犬が吠えついた．かつての住人は去り，見知らぬ男が作業をしていた．玄関前の石畳には，ピンクのコスモスが谷風にゆれていた．

なつかしいAX010氷河は，やせ細っていた．シェルパ頭は，もちろんリンジ．かれは，他の隊員（門田勤）とアイス・レーダーで氷河の厚さ測定．わたしは，若いシェルパと深さ1～2mの雪穴を掘っての積雪断面観測．なかなか気に入った雪穴を掘ってくれない．近くにいたリンジが，かれに要領を伝授してくれた．見違えるような，うまい雪穴が掘られるようになった．先行したリンジは，次の雪穴を，わたしが座って作業できるように，椅子がわりになる段まで付けて掘ってくれていた．

この氷河の調査が終わり，20年ぶりになるクンブ地域へ向かった．チベットや南極行きで長らくごぶさたしていた氷河や山村，なつかしいシェルパにも会える．だが，ジュンベシを出た初日の夜，宿に名大の研究室からのファックスを持ったメイル・ランナーが追いついた．昔のなつかしさなど吹っ飛ぶ緊急事で，翌朝リンジ・門田と別れ，180度ちがう道を帰途についた．帰国後しばらくして，アン・ドルジさんの訃報を聞いた．

そのII．30年ぶりのブータン（1997・98年）

1997年10月末，カトマンズからブータンのパロへ向かう飛行機のヒマラヤ側の窓際席は，始発のデリーからの乗客で占められていた．離陸して間もなく，ネパール・ヒマラヤの高峰が居並ぶ先に，カンチェンジュンガ，ヤルン・カンが近づいてくる．エグゼクティブ席をのぞくと，通路からでも窓越しの視界はまだましだった．そこへ居座ってしつこく山を見る．数日まえの悪天のためか，1973年に登ったヤルン・カンは岩壁部も新雪を被ったままだ．20数年前の懐かしいルートを目で追いきれないまま，機はさらに懐かしいブータンの上空に入った．

1967年1月，パイオニア・ワークをめざす京大の登山関係者の間で，当時きびしい入国制限のあったブータンでの活動を試みる話が起こった．わたしは学部の卒論をまとめる時期だったが，そっちのけで奔走した．そうしてブータン最高峰ガンケルプンツム初登頂をめざす京大山岳部隊が組織された．ただでさえ鎖国状態のブータンで，登山の実現は難関だ．覚悟のうえで手をつくしたが，同国政府への申請は認められず，計画は登路偵察および地理・氷河・気象調査のための山地旅行に縮小された．どうにかブータンから登山と観光の許可を得たが，当時ブータンの外交権を握っていたインド政府からインナーライン通過許可も取得せねばならなかった．そのため，11月末わたしはデリーへ飛んだ．

この許可も難題で，わたしの古いファイルには，京大総長から日本の内閣官房長官に宛てた協力依頼文書なども残っている．半年間ニューデリーでねばったものの壁は厚く，結局1月に一週間，6月に十日間の旅行しかできなかった．夢見たブータン・ヒマラヤの山々は遠い雲の中に隠されていた．

その後ブータンは外交面でも独立し，1983年からは登山隊にも門戸が開かれ，お金さえあればトレッキングや観光も自由になっていた．だがわたし自身のなかでは，その後ネパールやチベットに執心してきて，ブータンへのあの頃の思いが風化し去ろうとしていた．未知の魅力が薄れた誰でも入国できるブータンは，あのころ求めたものとは違うのだという意地めいたものが，隔世の感がするブータンへの，ある種の違和感につながっていたようだ．

そんな状態から目が覚めたのは，数年前のことだった．ずっとヒマラヤの氷河研究を続けてきたが，ブータンの氷河調査はまだどこも手をつけていないまま残されている．そこでの氷河変動がとりわけ興味深いことは，昔以上ともいえよう．新たなヒマラヤ氷河調査計画にブータンを組み込み，文部省の科学研究費がついて，30年ぶりのブータン再訪となった．今回は，関係者と話し合

うことが目的の5日間だけの訪問だ.

ブータンには,外国からの調査申請を認める制度はまだない.まず,やりたいことに関係者の理解を得て,どれだけの事ができ,どんな点でブータンの役に立てるかを探る必要があった.近年の地球温暖化のもとで世界の氷河は縮小しているが,モンスーンの夏雪で涵養されるヒマラヤで縮小がとりわけ顕著なことは,わたしたちの研究でわかっている.ブータンでは夏雪がことに多いため,氷河縮小もいっそう顕著と推察された.多数の氷河湖をかかえるブータンでは,3年前にも大規模な氷河湖決壊洪水(GLOF)があり,今後の対策が国家的課題となっていた.氷河変動はその末端の氷河湖の動向と密接に結びつく.ここに,ヒマラヤの氷河に最も詳しいと自負するわたしたちとブータン政府との接点があった.内務大臣と計画大臣,さらに氷河湖災害担当の地質調査所の所長などと実りのある話ができた.

最終日,どうしても寄りたかった,故・西岡京治さんがかつて拓いた農場を訪れた.西岡さんは1964年から農業指導のためパロで暮らし,ブータンに絶大な貢献をされて1992年に現地で亡くなられた.30年前には随分ごやっかいをおかけした.当時ブータンに来られて4年目の開拓者であったご夫妻のお宅に招かれたとき,「本当にブータンのことを考えてくれる人が来てくれればありがたいなあ」とおっしゃられた.あの頃学生だったわたしは,ブータンの将来を担う大臣級の方々に,ただ未踏の山に登りたい,と勝手なお願いをしていただけだった.今わたしにできることは,氷河研究.ヒマラヤの国で氷河を研究しようとするとき,今やGLOFは避けて通れないと痛感した.

翌年秋,30年前の夢が別の形でかなえられることになった.再訪したティンプーでGLOF担当省の通産大臣に会見した際,「十年前だったなら,あなた方の提案は相手にされなかったろう.地球温暖化と1994年のGLOFが起こったから受け入れられたのだ.」と気さくな大臣は,はっきりと言われた.ブータンは隣国インドと共同で氷河湖の現地調査をしたことはあるが,他国から最近申請があるものの,許可されたのはわたしたちが最初だった.

日本からは5人のメンバーで,GLOFの危険度評価と対策提言を目的に,今後の調査の予察も兼ねて広く見て回った(坂井,1999による調査紀行あり).約40日かけて500キロ近くを歩き,高度4,5千メートル級の峠も10以上越えた.移動日はいつも15～20キロの登り降りで本当にくたびれる旅だった.だが,かつて焦がれた地の山々と氷河・氷河湖に充たされた旅でもあった.

山旅を終えてから落ちつかない10日が経ち,関西空港に着いた.名古屋へ帰る新幹線に一人で落ちつき,缶ビールをゴクリと飲みこんだ時,ほんとうに,あのブータンを「やったぞ!」と,心底から実感がわきあがってきた.

そしてⅢ.28年ぶりのクンブ(2004年)

ネパールでは1999年を最後に,マオイスト(ネパール共産党毛沢東主義派)などによる治安悪化もあって,氷河変動の観測が途絶えていた.だが地球温暖化のもと,縮小をつづけるヒマラヤの氷河について,21世紀初頭の現状を,1970年代以来観測しているネパールで(安成・藤井,1983;渡辺・上田,2001),是非おさえておきたかった.

治安状況が好転したわけではなかったが,1996年に実現目前で引き返さざるをえなかったクンブ再訪を,8年経って果たすことになった.エベレストのクンブ氷河の変動観測を中心に,周辺の小型氷河も再測する若手4人(東京都立大OB・現役院生)に同行した.わたしには,1974年の6カ月と1976年の4カ月の滞在以来,28年ぶりであった.なつかしさは,氷河のほかにも,観測基地ハジュン(1973年4月7日～1976年10月5日)やシェルパの友人たちにおよぶ.

10月7日,入山途中のパンボチェで,1964年と1973年の登山隊でいっしょだったカルマ・シェルパの消息を,同行のシェルパにたずねた.今70才に近い往年の大シェルパ頭で,カトマンズで自適の暮らしをしているはずだった.が,4年前に病死との答え.聞いた瞬間,目がかすんだ.登山後もつき合いがありながら,何年も遅れて訃報を聞くのは,やるせなかった.

その日の道中,会いたいシェルパの家を訪ねたりしたが,出払っていたり消息がわからず,結局

だれにも会えずさびしかった．だが，男のシェルパばかり頭にあったが，そうだ！なつかしい女性シェルパもいたではないか．すぐ頭に浮かぶ名は，プー・サムジとニマ・ヤンジ．姉御肌と乙女タイプの姉妹コンビで，ヒマラヤの女らしく，たくましくほがらかだった．よくハジュンに来て調査行のポーターやメイル・ランナーになり，また自家製の酒を届けてくれたこと，自宅でごちそうになったこともある．この日，ペリチェの村奥にある，タムセルク・ビュー・ロッジという宿に泊まった．

翌朝，秀峰カンテガとタムセルクを望むロッジの前庭に，熟年美人の女主人が居た．彼女なら二人の消息を知っていそうだ．きのうから，わたしに向けた彼女の微笑みに，キラキラした感じを覚えていた．まさかとは思いつつ，頭にあった姉妹2人の名を，いつもと順番を逆にして声をかけた．「ニマ・ヤンジやプー・サムジを知らないか？」彼女はサッと自分の顔を指さし，「ニマ・ヤンジ！」と，わたしに抱きつかんばかりに答えた．思わずわたしも，目にポロッときた．プー・サムジはチュクンで大きなロッジを元気でやっていること，自分はいま49才で娘2人，息子1人，上の娘だけ結婚したが孫はまだいないなど，貫禄がついたが昔の天真爛漫そのままで語った（写真1）．

この日は高度順化のため，かつて延べ10カ月のクンブ滞在の拠点だったハジュン（高度4420 m）を経て，皆でその先の丘へ登る日だった．古いモレーンを登っていくと，遠く小屋があった辺りに，さほど崩れていない白っぽい石積み壁が見えた．そこはわたしには，何年も前から懐かしさを通り越して憧れめいた地となっていた．先行して，モレーン上の平坦地に出る．まず気象観測露場だった所を測器設置の痕跡が残っていないか見きわめ，居住していた石小屋の跡へ歩を進める．小屋と周りの石垣は，昔の配置のままだ（写真2）．小屋の壁となる石垣は真新しく，当時，煤で内側が黒ずんでいた壁とは違う．だがオンドルにした床や取り囲む壁の基礎は，そのままのようだ．この硬い床の上で，疲れきって，また地酒に酔っぱらい，幾夜眠ったことだろう．

翌朝クンブ氷河へ出発前，タムセルクを背景にニマ・ヤンジとツー・ショットの写真を撮る．昔はこんな機会はなかったが，自然に肩を組んでカメラに納まった．その後の3週間はクンブ氷河に滞在し，30年まえ観測を始めた小型氷河も巡った．クンブ氷河デブリ域の表面は低下し，年のせいかもしれないが，昔よりかなり荒れて起伏が激しく見え，近づき難かった．小型氷河も着実に？縮小し，うち最小だったコンマ・ティクペ氷河は消失していた．当時はわたし達しか通らなかったルートにも，外人トレッカーの列やテント村が見られた．滞在最後の3日間は，調査の人手も足り

写真1　30年前のニマ・ヤンジ（左）．

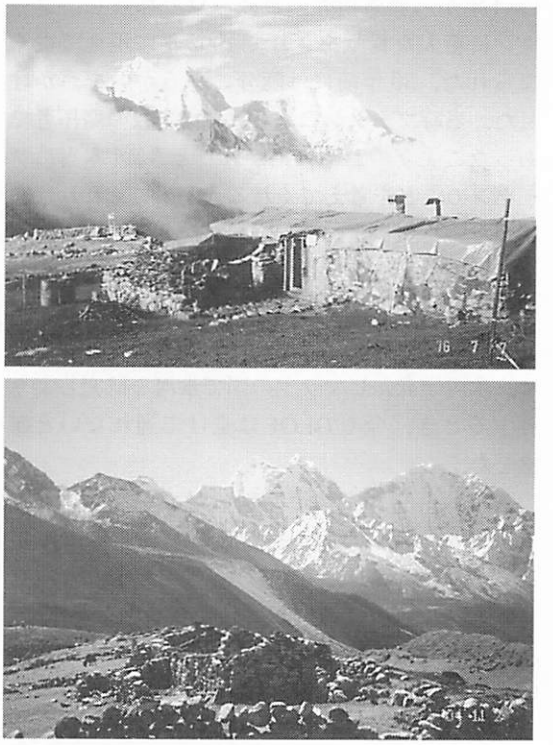

写真2　上：ハジュン基地1976年（左前方に百葉箱と露場）．
下：ハジュン小屋跡2004年（小屋の石壁は1976年当時の壁ではない）．

ていたので，クンブ氷河のキャンプから，決壊洪水が警戒されているイムジャ氷河湖へ，シェルパ一人を伴って観察旅行にでた．この旅では，チュクンにあるというプー・サムジのアマダブラム・ビュー・ロッジで2泊できるのだ．

初日，チュクンに着き，プー・サムジのロッジに泊まれたが，彼女は下の村へ買い物で，戻るのは明日かあさってとのこと．息子が居て，ロッジを切り盛りしていた．彼ロプサンはよく働き，日本語がうまい．土木研修のため数回訪日し，最長1年間いたこともあるという．訪日の世話をしたのは，まだ10代半ばだった頃ハジュン基地を3年近く切り盛りしたハクパ・ギャルブだそうだ．翌日は，イムジャ氷河湖を往復した．その夕方，ロッジ付近は暗くなったのに，プー・サムジが戻った様子はなく，もう会えないかと思った．だが食堂に行くとロプサンが，母が戻ってキッチンにいるという．

着いたばかりなのか，彼女は湯気がゆらめくマグカップを手に立っていた．うす暗いキッチンに入り「プー・サムジ」と呼びかける．闖入者に少しおどろいた様子．「30年まえハジュンでー」と言ったとたん，「アゲタさん！」．そのまま大勢の客がいる食堂へ引っ張られ，「何飲む！？何食べる！？」の歓迎ぶり．「ビール飲む？」「うん」で，缶ビールをごちそうになった．子供はロプサンのほか一男一女がカトマンズに居り，彼女は今53才．お互い孫は生まれていないので，まだおばあさん，おじいさんになっていないとか，上田さんは若いね，藤井さん・安成さん達どうしている？など，昔のままで陽気にしゃべった．彼女はここの人気者のようで，他の席にも引っ張り凧のにぎやかさだった．

翌朝ロッジを去るとき，門前でニマ・ヤンジの時とおなじく肩を組んで写真を撮った（写真3）．彼女は何人ものハジュン仲間の名をあげて，元気かとたずねた．憶えにくい日本人の名前を，メモするでもなく30年間もよく憶えているものだ．わたしは感謝の気持ちを込めて言った．「30年前，あなたは僕たちに大へん素晴らしいメモリーを残してくれた．ありがとう．」最後は声がつまり，胸がいっぱいになった．これから彼女ら一家は，すでに凍てつき始めたこのチュクンで，厳寒の冬を越す．

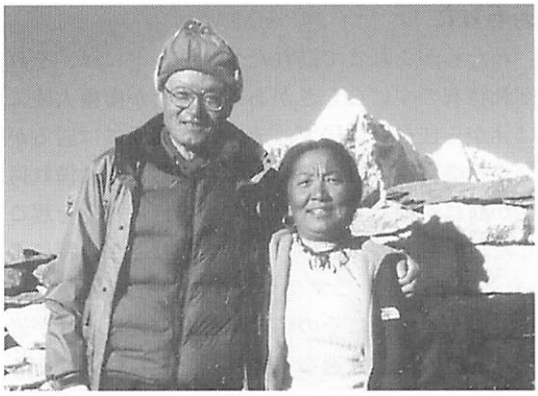

写真3　プー・サムジとチュクンにて（後方の山はタウチェ）．

写真4　ハジュン基地1976年6月3日（井上治郎のショロン地域への出発）．左から安成哲三，故・井上治郎，伊藤忠彦，ハクパ・ギャルブ（1974～76年基地付き），故・ペンバ・ツェリン（1973年基地付き），ナワン・カルマの父，佐藤和秀．

帰途，シェルパは先行させ，一人でルート沿いのハジュンにお別れに寄った．小屋まえの，昔もよく座っていたはずの平たい石に腰をおろした．快晴の青空のもと，山々の見晴らしがすばらしい．基地の廃墟をジイーと見つめていると，そこにかつてのメンバー，シェルパたちが，若いままで当時の小屋の前につどっている姿が浮かんだ（写真4）．目をつむると，ここで過ごした青春の日々は，氷河がまだ大きかった時代のおとぎ話だったようにも思えてくる．だが確かにここは，わたしたちのフィールドの原点であるし，ここに居たわたし達は，ともに過ごしたシェルパたちの人生にとっても，大切な意味があったのではないか．

星霜という言葉を，30年を経たクンブの氷河，土地，人たちから実感できた旅だった．

おわりに

わたしがこれまで訪れたフィールドには，それぞれ特有のすばらしさがあった．だが南極大陸には元から住む民は居ず，チベット高原には居るが交流の機会は限られていた．おなじように憧れ何度か訪れた地でも，ヒマラヤは，自ら行為を起こした地でもあり，思い入れと懐かしさが，特に澱い．29才の時，ヒマラヤ登山で生死の境から戻って以来，すでにその時の年令を越える歳月が過ぎた．その間，大過なく野外調査をしつづけることができた．なによりも，関係した氷河調査隊で仲間・後輩に悲しい事故なく今日に至ったことは，ありがたいとしみじみ思う．いま，心おきなく言うことができる．

フィールド・ワーク，ばんざい！

文　献

坂井亜規子，1999：ブータン氷河湖調査紀行．雪氷，**61**，465-469.

渡辺興亜・上田　豊，2001：ヒマラヤ氷河調査事始め．雪氷，**63**，147-157.

安成哲三・藤井理行，1983：ヒマラヤの気候と氷河．東京堂出版，254 pp.

(2005年3月7日受付)

中国新疆における雪氷災害

防災科学技術研究所　平島寛行

中国科学院の人工雪崩実験に参加するため，雪氷防災研究部門の阿部と平島は，2005年2月15日から24日にかけて，中国新疆に赴いた．この出張の目的は天山積雪・雪崩観測所付近における人工雪崩実験および，ウルムチからこの観測所までのルートにおけるダストの観測である．

新疆の奥地で観測を行うため，移動だけで片道4日かかった．飛行機で東京から北京まで約4時間，北京からウルムチまで約4時間．中国の西の果てだと思っていたウルムチは，驚くほど近代化が進んでいた．過去に何度か中国を旅行で訪れたことはあったが，ほんの数年前は，西部地域はほとんどの道路が悪路だった．ウルムチからイリを通って積雪・雪崩観測所のあるナラトまで，車で2日間の行程だが，これらの道路も良く舗装されており，日本の道路なみに走りやすくなっていた．積雪・雪崩観測所の場所を図1に示す．このように道路が舗装されたのはほんのここ数年の事で，それまでは道路が良くなかったため流通事情が悪く，新鮮な野菜は田舎まで届かなかったらしい．中国政府が行っている西部大開発はうまくいっているように感じた．

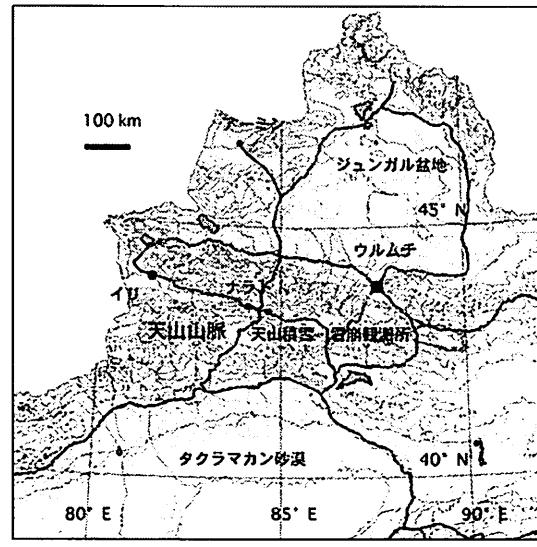

図1　新疆の地図．ウルムチ，イリ，ナラト，天山積雪・雪崩観測所，イリ，アーミン，ウルムチの順で移動した．

ナラトの町から観測所まで30キロほどだが，その途中途中に雪崩が発生した跡が見られた．道路は整備されたものの，雪崩予防柵やスノーシェッドなどの雪害対策設備はほとんどなく，現地では雪崩発生後に除雪機でデブリを除去して通行を